

令和2年漁期のあかいか(ソデイカ)漁業について

今漁期(令和2年漁期)のあかいか(ソデイカ)漁業について取りまとめましたのでお知らせします。

1 令和2年漁期の漁況

【兵庫県下各漁協(支所)の漁獲】

令和2年(2020年)の漁獲量(速報値)は、但馬漁協津居山支所8ト(2019年は6ト)、竹野支所6ト(同4ト)、柴山支所5ト(同5ト)、香住支所29ト(同23ト)、浜坂漁協7ト(同4ト)、**合計56ト(同42ト)**で、前年の133%、過去10年平均の38%でした。(図1)。

2015年(2ト)、2011年(35ト)、2019年(42ト)に次いで過去10年で4番目に低い漁獲量でした。

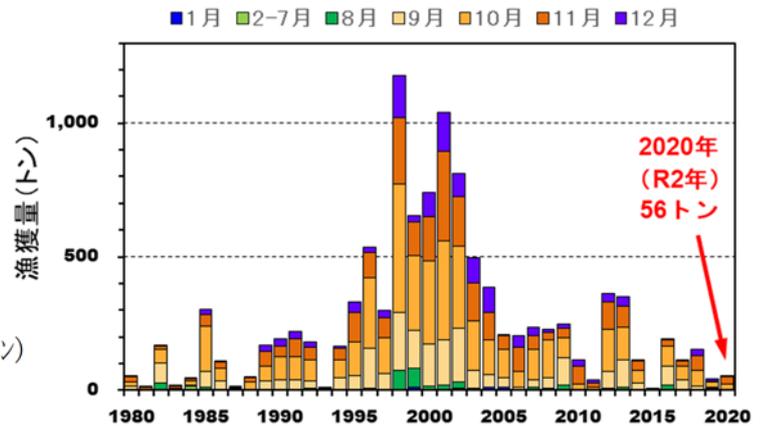


図1 あかいか(ソデイカ)漁獲量の推移(但馬全体)

2 価格の推移

県下全域の漁獲金額(速報値)は、**合計4,661万円(2019年は3,510万円)**で、前年の133%でした。漁獲量が低迷したため、8月~10月の1kgあたりの平均単価は900円台から1,200円台で推移しました(図2)。

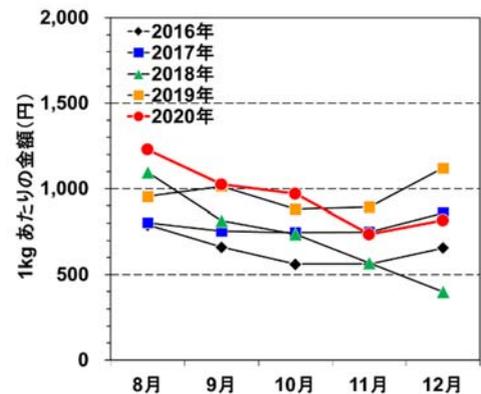


図2 あかいか(ソデイカ)平均単価の推移(但馬全体)

3 漁況予報の結果

今年度、当センターでは、7月30日に「あかいか(ソデイカ)長期漁況予報(予報期間:9~11月)」、10月12日に「中短期予報(漁況経過と漁期後半の予報)」をそれぞれ発表しました。主な予報内容と結果は、以下のとおりです。

① 来遊水準・平均漁獲量

『来遊水準は、過去5年平均(2014~2019年)と比べると「**平年並み~やや多め**」、過去10年平均(2009~2019年)と比べると「**平年並み**」の水準となる見込み、1日1隻あたりの漁獲量(9~11月平均)は**160±80kg**前後の見込み』と予報(7月)。

『過去の傾向から本格的な漁期に入る9月の水準が低調な場合は漁期後半も引きずることが多く、長期漁況予報の来遊指標値160kg前後(±80kg)に対して、80kg~160kgと低めに推移する可能性が高い。』と予報(10月)。

結果:→ ×/△:『9~11月の1日1隻あたりの平均漁獲量は**94kg**と予測範囲のほぼ下限で、11月に一時的に増加しましたが来遊水準は前年度漁期並みと低迷しました。但馬全体の漁獲量は、来遊水準が低くソデイカ漁の操業隻数が伸びなかったこともあり、過去10年平均の**4割程度**の水準に留まりました。』

② 漁場

『山陰・若狭沖冷水域の張り出しは、規模は「**やや小さく**」、接岸状況は「**やや離岸**」、対馬暖流域の50m深水温は日本海西部で「**平年並み**」で推移し、漁場は「**平年並み~やや沿岸寄り**」となる見込み』と予報(7月)。

『山陰・若狭沖の冷水域の張り出しの規模は「**やや小さい**」、接岸距離は「**やや接岸**」で経過する見込み、『好漁場の指標となる水深50m深の19℃等温線の南縁はどちらも北緯**36°**以北で概ね沖合に広く分布

するため、イカの分布は沖合まで分散しやすい』と予報（10月）。

結果：→ △/○：『冷水域の張り出しは、規模は「小さく」、接岸状況は「離岸」傾向にありました。また、今漁期は丹後半島沖を中心に暖水域が配置しており、但馬沖～若狭湾沖にかけて100m～200m深度で周囲より高い水温帯が広く分布していました。』

4 今漁期の漁模様の要因について

① 沖縄県の漁況

日本海で漁獲されるソデイカは、2～3月を盛期とする1～9月に発生し、対馬暖流の上流部から成長しながら来遊してくる資源と考えられています。沖縄県の漁獲量と但馬の来遊水準とは必ずしも一致しませんが、沖縄県の過去10漁期で最も漁獲量が少なかった2010-2011年漁期（平成22年11月～平成23年6月；1,622トン）に対して、2011年の但馬も35トンと低迷した年がありました。

沖縄県の2018-2019年漁期（令和元年11月～令和2年5月）の漁獲量は、過去10漁期で2番目に少ない1,729トンであり、2011年の但馬も56トンと低迷しました。

（沖縄県漁獲量：出典 沖縄県水産海洋技術センター、<https://www.pref.okinawa.jp/fish/kenkyu/kankobutu/sodeika.html>）

② 冷夏/エルニーニョ現象

2015年はエルニーニョの影響による冷夏で、対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。また、1993年はエルニーニョ非発生年ですが記録的な冷夏であり、これにより対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。

2020年は夏からラニーニャの発生が示されており、冷夏ではなかったことから今漁期の漁模様には影響していなかったものと考えられます。

（エルニーニョ：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/el_nino/learning/faq/el_nino_table.html）

③ 対馬海峡の環境条件

ソデイカは南方から対馬海峡を通過して日本海へ来遊しますが、これまでの調査結果から来遊時期と考えられる6月の対馬暖流の環境条件（水温、塩分、潮位等）と、9～11月の但馬の来遊水準との間に関係があることが分かっています。2020年6月の環境条件は「前年並み～やや多め」の来遊水準の予測を示しましたが、今漁期の不漁を予見できず過去の関係が当てはまりませんでした。

また、気象庁の「対馬暖流の勢力の時系列」から、2020年6月～10月までの対馬暖流の勢力は9月後半から10月にかけてやや弱いものの概ね過去29年平均と同程度で推移していました。

これらのことから、対馬海峡の環境条件は日本海へのソデイカの来遊には影響していなかったものと考えられます。

（対馬暖流の勢力：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/tsushima/tsushima_area.html）

④ 水温分布

これまでの調査結果から但馬沖の好漁場は水深50mの水温が19℃以上、水深100mの水温が14～15℃以上の海域に形成されることが分かっています。但馬沖の水温分布に影響する山陰・若狭沖冷水の中心部は概ね隠岐諸島寄り推移し、11月以降は規模が小さくなりました。但馬沖～若狭湾にかけて水深50mの19℃等温線の配置は9月～11月上旬まで沖合まで広く分布し、水深100mにおける水温15℃の等温線の配置も沖合に広く分布しました。このことからソデイカは沖合まで広く分散し、好漁場は形成されにくかったと考えられます。

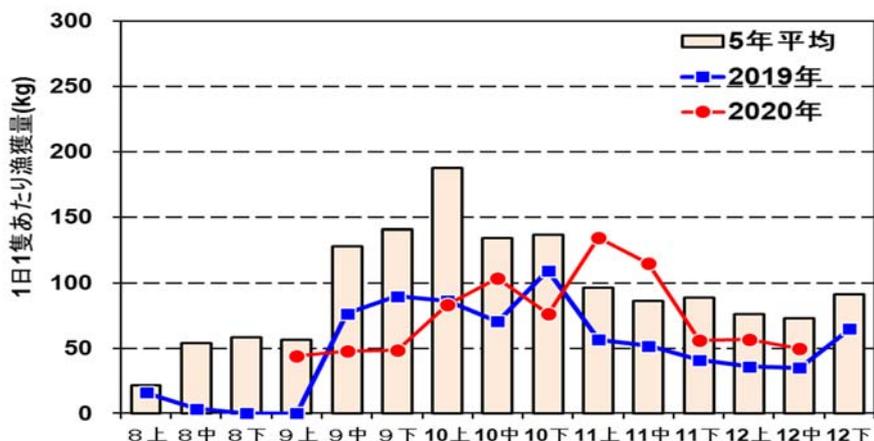
（水温分布：出典 水産教育研究機構、<http://jade2.dc.affrc.go.jp/jade2/>）

⑤ その他

黄海・東シナ海等で発生する傘径が1m以上にもなる大型クラゲが、年によって対馬海峡を通過して日本海へ大量に来遊することがあります。2020年は大量出現ではないものの7月以降に対馬海峡から日本海の広い海域で断続的に出現が確認されており、一部では100個体以上の入網報告もありました。大型クラゲのまとまった出現がソデイカの稚イカの来遊と重なる時期があり、これが日本海への来遊に影響した可能性が考えられます。

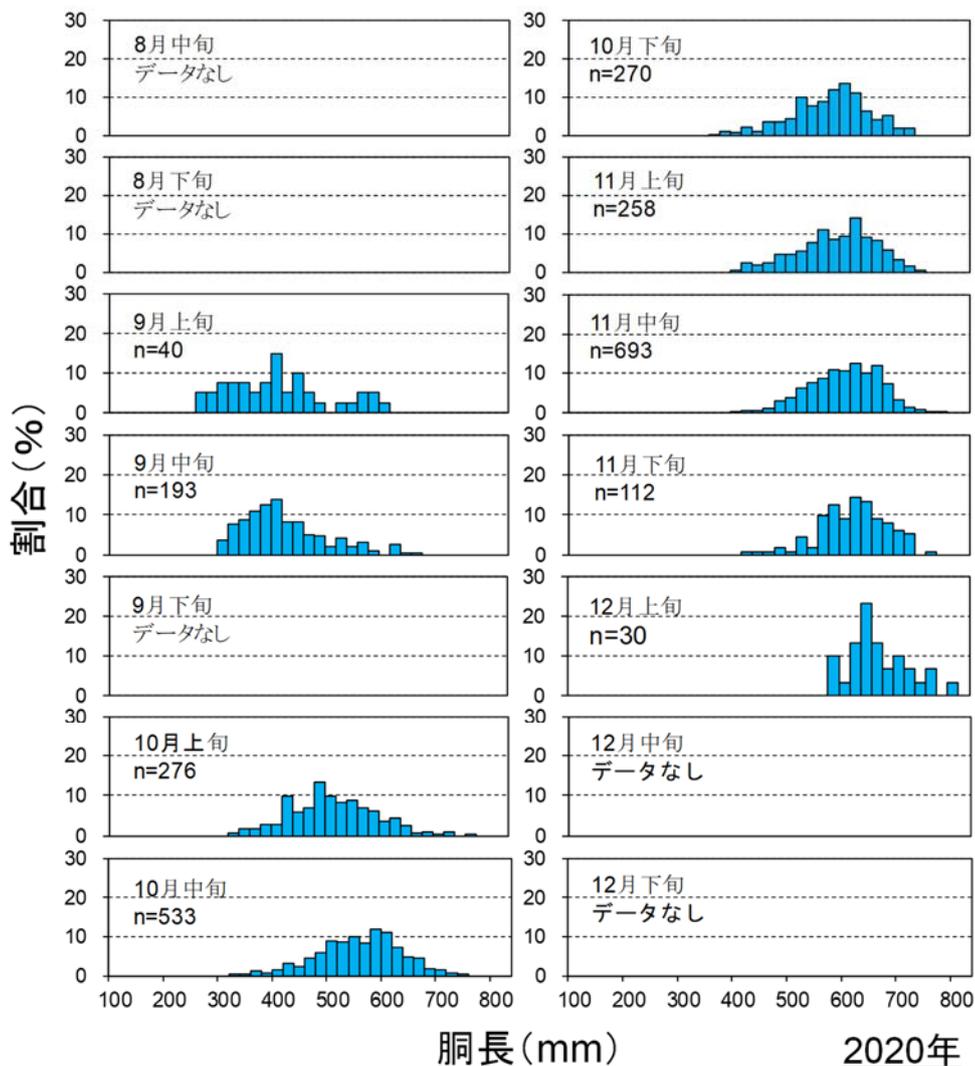
（大型クラゲ出現状況：出典 漁業情報サービスセンター、<http://www.jafic.or.jp/kurage/index.html>）

今漁期の漁模様について複数の要因が影響していると考えられますが、はっきりとした原因は分かっていません。ソデイカ漁業は南方からの来遊量の影響が大きい資源ですが、近年は来遊水準や漁獲量の変動が大きくなっています。また体長組成の推移も年ごとに傾向が大きく変わっています。継続してデータを蓄積していくことが重要となりますので、今後も引き続き調査へのご協力をよろしくお願いいたします。



※来遊量指標は JF 但馬香住支所の 1 日 1 隻あたりの平均漁獲量

図3 あかいか(ソデイカ)来遊量指標の旬別推移



※n は各旬に測定したあかいか(ソデイカ)の数を示します。

図4 2020年漁期の JF 但馬香住支所に水揚げされたあかいか(ソデイカ)の体長組成